

[D年] 聖霊降臨節第15主日(2024年8月25日)

【旧約聖書日課】 出エジプト記 13章17～22節

17さて、ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ街道には導かれなかった。それは近道であったが、民が戦わねばならぬことを知って後悔し、エジプトに帰ろうとするかもしれない、と思われたからである。18神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。イスラエルの人々は、隊伍を整えてエジプトの国から上った。19モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたたちを顧みられる。そのとき、わたしの骨をここから一緒に携えて上るように」と言って、イスラエルの子らに固く誓わせたからである。20一行はスコトから採立って、荒れ野の端のエタムに宿営した。21主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。22昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。

【使徒書日課】

エフェソの信徒への手紙 5章11～20節

11実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。12彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。

「眠りについていてる者、起きよ。

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

15愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。16時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。17だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りな

さい。18酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもどです。むしろ、霊に満たされ、19詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。20そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 8章12～20節

12イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」13それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」14イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。15あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。16しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。17あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。18わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてくださる。」19彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになった。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」20イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記13章17～22節

17ファラオが民を去らせたとき、神は彼らをペリシテ人の住む道に導かれなかった。実際それは近道であったが、民が戦いを目前にして後悔し、エジプトへ戻るかもしれない、と神は考えたからである。18そこで神は葦の海に通じる荒れ野の道へと民を向かわせたので、イスラエルの人々は隊列を整えてエジプトの地から上った。19モーセはヨセフの骨を携えていた。ヨセフが、「神は必ずあなたがたを顧みられる。その時、私の骨をここから携えて上らなければならない」と言って、イスラエルの人々に固く誓わせたからである。20一行はスコトをたち、荒れ野の端にあるエタムに宿営した。21主は彼らの先を歩まれ、も夜も歩めるよう、昼は雲の柱によって彼らを導き、夜は火の柱によって彼らを照らされた。22昼は雲の柱、夜は火の柱が民の前を離れることはなかった。

エフェソの信徒への手紙5章11～20節

11実りのない闇の業に加わらず、むしろそれを明るみに出さなさい。12彼らがひそかに行っていることは、口にすることも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのものは光によって明るみに出されて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光だからです。それゆえ、こう言われています。

「眠っている者よ、起きよ。

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、

キリストはあなたを照らされる。」

15そこで、知恵のない者ではなく、知恵のある者として、どのように歩んでいるか、よく注意しなさい。16時をよく用いなさい。今は悪い時代だからです。17だから、愚かにならず、

主の御心が何であるかを悟りなさい。18酒に酔ってはなりません。それは身を持ち崩す元です。むしろ、霊に満たされ、19互いに詩と賛歌と霊の歌を唱え、主に向かって心から歌い、また賛美しなさい。20いつも、あらゆることについて、私たちの主イエス・キリストの名により、父なる神に感謝しなさい。

ヨハネによる福音書8章12～20節

12イエスは再び言われた。「私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩かず、命の光を持つ。」13それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」14イエスは答えて言われた。「たとえ私が自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、私は知っているからだ。しかし、あなたがたは、私がどこから来てどこへ行くのか、知らない。15あなたがたは肉に従って裁くが、私は誰をも裁かない。16しかし、もし私が裁くとすれば、私の裁きは真実である。なぜなら私は独りではなく、私をお遣わしになった父と共にいるからである。17あなたがたの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。18私は自分について証しをしており、私をお遣わしになった父も私について証しをしてくださる。」19彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになった。「あなたがたは、私も私の父も知らない。もし、私を知っているなら、私の父をも知っているはずだ。」20イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、誰もイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・8月25日「聖霊降臨節第15主日」の日課主題は「新しい人間」。

・旧約聖書日課は、「主日エジプト記」から、エジプトを出た民が「雲の柱・火の柱」をしるしとする神と共に道を進むものであったことを物語る箇所。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、キリストが光となって暗闇を照らされるかたであることを説く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスが「わたしは世の光」と自己開示されることから始められる一連の対話の冒頭箇所。

旧約日課(出エジプト13章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第二巻、「申命記」までの四書で展開する「モーセ物語」の第一部を構成する。本書については、前週資料「聖書と祈りの会 240814」を参照。

・日課箇所は、モーセに導かれて旅をするイスラエルの人々の「旅程録」の一つとして置かれている。「旅程録」は、「モーセ物語」中で移動を描く要所ごとに置かれている。エジプトを出てからの一連の「旅程録」は、「民数記」の終わりに再度まとめられている(民33:1~48)。これらの「旅程録」は、詳細にわたっているが、そこで示される各地名の指す地は、必ずしも同定されていない場合がある。また、この「旅程録」が何のために置かれ、繰り返されているのか、その意図は明瞭ではない。一義的には、「モーセ物語」を「旅物語」として構成する上で、その物語に現実味を帯びさせるために、「旅程録」は置かれていると言える。また、「モーセ物語」で展開されるイスラエルの民を導かれる神の意図を説明するために、「旅程録」が用いられているとも言える。加えて、これらの「旅程録」には、モーセおよびその後継者ヨシュアを開祖と位置づける聖所集団に由縁のある聖地を示す目的があったかもしれない。それらの聖地は、その聖所集団の起源譚を構成する地、あるいは、その聖所集団に連なる集団の所在する地であったかもしれない。

・日課箇所、イスラエルの隊伍は、昼は雲の柱、夜は火の柱をしるしとする神に導かれるものとして示される。このうち「雲の柱」あるいは「雲」は、「モーセ物語」の中でも特に「出エジプト記」と「民数記」において、民の旅を導く神のしるしとして繰り返言及されるものであるが、殊に「シナイ山」(出19章、24章)と「臨在の幕屋」(出33:7~、40:34~、民9:15~など)に結びついて描かれる。おそらく、「シナイ山」に結びついた神信仰が「幕屋」の祭儀に置き換えられていくに際して、神臨在の象徴として「雲」の存在が示されたのだろう。もっとも、「幕屋」に立つ「雲の柱」(および「火の柱」)は、犠牲祭儀において発生する火煙であったかもしれない。「火」を神臨在の手掛かりとする宗教には、ペルシア発祥のゾロアスター教がある。

使徒書日課(エフェソ5章)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の五番目に置かれた書簡文書。パウロが活動後期に二年ほど滞在し拠点としていたとされるエフェソの教会共同体に宛てて記した書簡としてまとめられている。現代の聖書学者の中には、本書をパウロの後継者らによる偽書(第二パウロ書簡)として扱う者もあるが、これを積極的に支持する根拠が示されているわけではない。パウロがエフェソを活動拠点とするに至るまでの経緯については、「使徒言行録」16~19章など限られた伝承資料によって知るのみである。それによれば、パウロは、シリア・アンティオキアの教会共同体から派遣されていたバルナバ宣教団で意見が対立して離脱し独自の宣教団を組織、マケドニア伝道(フィリピ、テサロニケなど)を試みるが十分な結果を得られないまま、短期間でアテネを経てコリントにたどり着いている。その地でローマの教会共同体に属する人々と共に教会共同体形成に携わることを通して、パウロは、かつてバルナバと対立した自分の主張を修正し、調停的・包摂的な福音理解を基礎とするようになった。この福音理解が使徒たちと共通のものであることを、エルサレムおよびアンティオキアの教会共同体でも認めてもらった後に、パウロは初めて、エフェソに活動拠点を置くようになった。ところが、数年後に何らかのトラブルに巻き込まれ、同地を拠点として活動を続けることが困難になり、パウロは、マケドニアやコリントの教会共同体の了解を得た上で、自分の活動拠点をローマに移すことを考え、その承認を得るためにエルサレムを訪れている。このような過程の中で、パウロは、活動を続けられなくなって離れたエフェソの教会共同体に対して、自分の福音理解を提示し、対立が本意ではないことを示すために、本書簡を著したと見ることができると言える。このような経緯から、本書簡は、もっぱら、キリストの福音を「隔ての壁を取り除く」和解として位置づけ、「教会共同体の一致」を主唱するものとなっている。

・日課箇所および前段には、集中的に「光(フォース)」という語が用いられている(8,9,13,14節)。本書簡でこの語が用いられるのはこの4例のみであり、「パウロ書簡集」全体でも用例は多くない(ローマ2:19、13:12、IIコリ4:6、6:14、11:14、コロ1:12、Iテサ5:5、Iテモ6:16)。これらの用例で、パウロは、もっぱら「光」を「暗闇」の対義として一般的な用い方をしているが、日課箇所などでは、「光の子」と「闇の子」という表現で示されるような人の属性を指して用いている場合もある。「光の子」と「闇の子」という表現で示される対立構図は、「死海文書」や「グノーシス文書」でも知られるとされ、それらの思想との関連性が指摘される場合もあるが、本書簡の全体的な思想傾向からは二陣営対立構図に基づく世界観は見られず、むしろ、福音に基づいて神~キリストを頂点とした一元論的世界観を構想している、とも言える。そのような世界観は、「ヨハネ福音書」とも共通すると考えられる。

福音書日課(ヨハネ 8 章より)

・日課箇所は、「仮庵祭」に際してエルサレムに上られた主イエスが境内で人々と議論された一連の対話集の第二の部分の一部。「仮庵祭」の枠組みは 7 章から 10:21 まで続き、途中に「姦通の女の逸話」(8:1~11)と「生まれつきの盲人の癒しの逸話」(9:1~12)を挟んで、三つの部分で構成される。日課箇所は、「姦通の女の逸話」に続いて置かれた第二の部分の冒頭に相当する。そこで、日課箇所の場面設定は、8:1~2 で示唆される通り、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」(7:37)の翌日、ということになる。ただし、古い写本では「姦通の女の逸話」を含む 7:53~8:11 を欠き、日課箇所(8:12 以下)は 7:52 に接続しており、その場合の場面設定は、「盛大に祭りの祝われた終わりの日の翌日」ではなく、「盛大に祭りの祝われた当日」ということになる。

・日課箇所冒頭で主イエスが告げている「世の光」という表現は、「ヨハネ福音書」では、ここを含めて三度みられ(9:5、11:9)、いずれもイエス・キリストを指して用いられているとみなせる。他方、「マタイ福音書」にも同様の表現を用いた教えが出てくるが(マタイ 5:14)、そこでは「あなたがた」すなわち主イエスに従う弟子たちが「世の光」と宣べられており、趣旨が異なる。とは言え、「マタイ福音書」の基本的な主張は、主イエスに従う弟子たちが主イエスと同じような考えや振る舞いをするようになることであり、弟子たちを「世の光」と宣べる背景には、主イエスが「世の光」とあるという前提があると見ることもできる。

・「光」は、「ヨハネ福音書」の神学思想における重要なキーワードとなっており、本書冒頭の序文でも特徴的な比喩として用いられている(1:1~9)。日課箇所も、序文の思想に沿った表現となっている。

・13 節、14 節、18 節「証しをする(マルテュレオー)」は、「使徒言行録」以下の使徒書で「新約」全体の用例(78 例)の半数が見られ、広く用いられている用語であるが、四福音書ではほとんど「ヨハネ福音書」に集中している(「ヨハネ」以外ではマタイ 1 例、ルカ 1 例のみ)。名詞形「証し(マルテュリア)」(日課箇所では 13 節、14 節、17 節に各 1 例)の用例(新約中 37 例)も同様の傾向。この語の原義は「証言する／証言」で、「証明する・確かめる／確認・認証」などの意でも用いられる。

来週の誕生日 (8 月 25 日~31 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-205「今日は光が」(=□2 番、□55 番)は、19 世紀英国教会司祭の J.エラートンがチェスター大聖堂用の讃美歌集のために作詞した、主日の意義を歌う讃美歌。曲は、「幼子の日(無辜の聖嬰兒の記念日)」のための讃美歌に付けられたものを転用。

・21-471「勝利をのぞみ」(=□134 番、□164 番)は、18 世紀ごろから歌われていた黒人霊歌(もとは労働歌?)が原型となって 1940 年代から広く歌われるようになったと考えられている讃美歌。1960 年代のアメリカ公民権運動の中で盛んに歌われるようになり、教会の讃美歌集にも取り入れられてきたが、近年の讃美歌集では採用されなくなっている。ワシントン大行進(1963 年 8 月 28 日)でこの歌を歌いながら行進する人々の姿が映像で記録されている。

・21-503「ひかりにいます主」(=Ⅱ28 番)は、18 世紀ドイツ・ヘルンフート兄弟団の指導者ツィンツェンドルフの原詞(15 節版)を J.ウェスレーが英訳した英語版で広く知られる。曲は、18-19 世紀オーストリアの音楽家プレイエルの原曲を 19 世紀英国の作曲家 W.ガーディナーが編曲したもの。

21-205「今日は光が」

This is the day of light

1. This is the day of light — / let there be light today! / Arise, O Christ, to end our night / and chase its gloom away.
2. This is the day of rest — / our inner strength renew; / on lives by many cares oppressed / send your freshening dew.
3. This is the day of peace — / with peace our spirits fill; / bid all the blasts of discord cease, / the waves of strife be still.
4. This is the day of prayer - / let earth to heaven draw near! / Lift up our hearts to seek you there; / come down to meet us here.
5. This is the first of days: / come with your living breath / and wake dead souls to love and praise, / O Victor over death!

21-471「勝利をのぞみ」

We shall overcome

1. We shall overcome, we shall overcome,
we shall overcome someday!
Oh, deep in my heart I do believe
we shall overcome someday!
2. We'll walk hand in hand.
3. We shall all be free.
4. We shall live in peace.
5. The Lord will see us through.

21-503「ひかりにいます主」

*Seelen-Bräutigam**O thou to whose all-searching sight*

1. O Thou, to Whose all-searching sight / The darkness shineth as the light, / Search, prove my heart; it pants for Thee; / O burst these bonds, and set it free.
2. Wash out its stains, refine its dross, / Nail my affections to the Cross; / Hallow each thought; let all within / Be clean as Thou, my Lord, art clean.
3. If in this darksome wild I stray, / Be Thou my Light, be Thou my Way; / No foes, no evil need I fear, / If Thou, my Lord, my God, art near.
4. Saviour, where'er Thy steps I see, / Dauntless, untried, I follow Thee; / O let Thy hand support me still, / And lead me to Thy holy hill.
5. If rough and thorny be the way, / My strength proportion to my day; / Till toil and grief and pain shall cease, / Where all is calm, and joy, and peace. / Amen.